

ウェルカム、ポリーニアン

二〇一六年四月十三日

バイブル・サービス

矢 口 洋 生

入学式を終えて、ちょうど桜の綺麗な季節です。みなさん気持ちよく大学生活を始めたのではないかなと思います。入学式の中で理事長のシスター式井が、「皆さんは、学生証を手に入れたとともにポリーニアンとして大学に来ることになりました」という趣旨のことをおっしゃいました。そのポリーニアンという言葉について、少し解説が必要かと思いましたので、今日はその話をしたいと思います。

皆さんポリーニアンと言っても何のことか分からないでしょう。人によっては、ポリネシアンと思う人もいて、「なぜ大学に入ったら、私はポリネシアンになってしまっただろう」と迷った人もいます。

では、ポリーニアンという言葉の説明するために、聖書のある箇所を読みたいと思います。もうすぐ授業でキリスト教学が始まると、この箇所を読むことになるかもしれません。「使徒言行録」という書の中のある一場面です。

「使徒言行録」九章一節〜九節

サウロは主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手

紙を求めた。

主の弟子というのは、キリストの弟子たちです。サウロという人が弟子たちを脅迫して殺そうとした。そして、ユダヤ教の大祭司のところに行き、ダマスコ（今のシリアにある都市）の諸会堂あての手紙を求めたと書いてあります。

それは、この道に従う者（この道とは、イエス・キリストの道。イエス・キリストの道に従う者）を見つけ出したら、男女を問わずに縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」と、呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか。」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。サウロは、地面から起き上がって目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

という小さなエピソードがあります。場面をもう少し解説しましょう。これが起きたのは、約二千年弱前のことです。古代、一世紀の話です。場所は、今のシリアやイスラエル辺りで、いわゆる中近東と呼ばれているところです。サウロという人は、もともと、今のトルコの生まれです。今でもそこにサウロの生まれた町があり、サウロが生ま

れた家や井戸も残っているようです。要するにサウロは実在の人物です。非常に熱心な宗教家と言っていていいでしょう。そして熱心を通り越して、ちょっと熱狂的などころがあり、イエス・キリストの弟子たちは、最初、邪教の信者として取り締まりの対象になっていました。サウロは非常に熱心な人だったので、胡散臭い人たちは、みんな縛り上げて連行してしまおうという気持ちになったようです。そのためにダマスコという町に向かっていたのです。

これは今でもある大きな町です。そして、そこで神秘的体験をするわけです。声は聞こえなければ、何も見えない。しかも、サウロにはだけはっきり聞こえる声に遭遇するのです。この体験を通して、サウロは、「自分は間違っていた。見当違いのことをしていた」と突然、気がつくのです。サウロの回心、として知られる出来事です。この体験をした後、サウロは人格も、考え方も変わってしまったのです。それまでは、イエス・キリストは胡散臭い、イエス・キリストの弟子はとんでもないやつらだ、と信じ込んで激しく取り締まっていたのが、急に、イエス・キリストのためならどこまでも行こう、と考えるようになります。劇的な変化が起きて、宣教師パウロが誕生したのです。さて、ここで名前に注目してみたいと思います。「サウロ」という名前で出てきています。このサウロという名前が、この回心の後、「パウロ」という名前に変わります。サウロとパウロは同じ人物です。この人のユダヤ民族名はサウルです。この民族名をギリシャ語風に読むと、サウロという呼び方になります。なぜ、ギリシャ語風に読むかという点、当時、この地域全体の共通語がギリシャ語だったからです。また、新約聖書はギリシャ語で書かれたものですから、その中ではサウロと表記されています。「求められる」「求められし者」というような意味です。新約聖書はギリシャ語で書かれています。その地域の共通語です。しかし、どこからか聞こえてきた声を読み直してみると、面白いことが分かります。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」という声です。ここでは「サウロ」が、「サウル」になっているのです。これはミスプリではありません。同じ名前ですが、ユダヤ民族の名

前、ユダヤ人の言語、ヘブライ語、この人の母国語による呼び方なのです。あえて母国語で声が聞こえてきたこと、あるいは、そのようにパウロの耳に声が響いてきたことには重要なメッセージが込められていると思います。その声の持ち主が、ユダヤの伝統に密着した方であることを示唆するように思えます。異教の神、流行の神ではなく、アブラハム・イサク・ヤコブにも語りかけたイスラエルの神であることが暗示されているように思えます。

この物語の後、このパウロは、イエス・キリストのことを人々に伝えるようになります。その使命を遂行するために、パウロ（サウル）は、より一般的な名前を語ることとなります。それがパウロです。彼の活動領域における共通言語はギリシャ語ですが、そこは行政的にはローマ帝国の支配下でした。そのため今度は、ローマ風の名前を使うことになったのです。ローマ化されてパウロからパウロになるわけです。パウロというのは割とポピュラーな名前で、「小さい」「つつましい」という意味を伴うようです。したがって元来のサウルがサウルになり、そしてパウロと呼ばれるようになって、キリスト教の歴史に大きな足跡を残すこととなります。パウロは、ローマ帝国中をあちこち旅しながら、イエス・キリストを伝え歩く大伝道者になり、そして、そのメッセージは二千年後の私たちにも語りかけてくるのです。その名前はいろいろな言語で表記され、漢字では「保羅」と書きます。中国語の聖書ではこの文字を使います。明治に入って聖書が日本語に翻訳されたとき、この漢字を採用しています。今はあまり見かけませんが、この漢字で名前を付けられた日本人もいます。英語ではポールです。フランス語、ドイツ語も一緒です。それは「パウロ」の英語名、あるいはフランス語表記、ドイツ語表記です。このポールという固有名詞を形容詞にすると、ポーリンになります。ポール（すなわちパウロ）の形容詞形ですから、「パウロと関係する」「パウロに由来する」といった意味です。例えばパウロに由来する書簡を、英語ではポーリン・エピッスルと言います。さらにそこから、もう一つ、ポーリニアンという言葉が出てきます。これは、ポーリンという形容詞の

名詞形です。名詞↓形容詞↓名詞の変遷が複雑ですが、「パウロに関連する人や組織」「パウロにつながった人や組織」という意味です。入学式で、理事長が、「皆さんは学生証を手にしたとともに、ポーリニアンになったのですよ」とおっしゃいました。それは、「パウロにゆかりがある大学」に入学して、皆さん自身も「パウロに縁がある人」になったという意味です。この大学は、修道会が設立して運営している大学です。その修道会は、シャルトル聖パウロ修道女会です。名前にパウロが入っているのです。この修道会はパウロの志を継いだ修道会なのです。ですから、ポーリニアンの修道会であり、この大学はポーリニアンの大学なのです。ここで働いている人、学んでいる人、教員、職員、学生、皆がポーリニアンになるのです。ここだけではありません。東京にある白百合女子大学、高校も中学も、函館や盛岡も、皆、ポーリニアンなのです。日本だけではなく、フィリピンやインドネシア、ベトナムなどにある修道会系列の学校・学生・教職員すべてがポーリニアンなのです。フィリピンの同修道会が経営する大学を私たちが訪問する時、ポーリニアンとしてご挨拶をするわけです。お互いに国は違い、言語は違うけれど、ポーリニアンだよ、と言って仲良くなれるのです。素晴らしいことです。したがって、皆さん、ポーリニアンの世界へウェルカム。皆さんはポーリニアンの仲間入りをして、あのパウロと縁ができたのです。どうぞ良き、素敵な四年間を新しいつながりの中で送ってください。

(グローバル・スタディーズ学科教授)